

夢中になつてくたばつちまえよ

デカチン

よお、ヒーロー。わざわざ会いに来てやったぜ。何十年ぶりだろうな。

いやまあ墓に向かつて久しぶりも糞もないか。

お前はもうあっち側に逝つちまった。世界で一番強かった男は、もういないんだよな。

それにしたつてよ、なんだいこりや。幾らなんでも寂れすぎだぜこいつは。なんにもねえ、花一つ添えられちやいない。

こんなんならなにか買つてくるんだつた。

昔はもう少し気が利いたんだがな。結構モテたの知ってるだろ、お前だつて。

お前はさっぱりだつたがな、ヒヒヒ。

彼女作んねえの？ つて聞いてもどうでもいい、興味がないの一点張りだつたもんな。まあいいか。

それに、こんなザマでも、お前らしいっちゃお前らしいよ。

あの日のこと覚えてるか？

ガキが二人で、小遣い握り締めて。

薄暗い的小屋の中で、リングだけはライトを浴びて。

その上で腕振り回して殴り合ってるんだ。顔も名前も知らない、見たことも聞いたこともないおっさんたちが。

俺にはその二人がライトの光なんかよりも輝いて見えた。

漫画の世界のキャラクターみたいな、違う世界の人間だったよ、あれは。

お前だってそんな感じだったろ。だってよ、リングを見上げるお前の眼も、負けなくらいにキラキラしてた。

そして、俺たちは同じ夢を抱いた。

口にしなくたってわかる。そういうもんだ。そういうもんだろ？

あの日から俺たちは未来に向かって走り出した。

お前は気付いてたか？ 俺は全然だった。

そんなこと考えもしなかった。酔っ払っていた。

だから気付かない。

俺とお前、夢をかなえられるのは一人だってことにさ。

俺たちは二人で走り出した。

いつもお前が隣にいた。

苦しいときも、辛いときも。楽しいときも、嬉しいときも。

いつもお前は隣にいた。

俺たち二人ならなんだってやれた。

口だけの先輩もきにならねえエリート野郎も、みんなぶちのめした。

俺たちは同じ光を見ていた。

いつからだろうな。

二人並んで表彰台上がって。俺はいつもお前を見上げていた。

もう俺の隣には誰もいなかった。

お前は俺の前にいた。

お前の背中が目の前を遮っていた。

お前が未来を見ている時、俺に見えていたのはお前の背中だけだった。

それでも、いつかはお前を越えられると思っていた。お互いプロになって、リングに上がるまでは思っていたさ。

今までもあった。

何度だってあった。

その度に乗れ越えてきた。

頑張っ頑張っ、それでも駄目ならもっと頑張っ。そうすりやどうにかなっってきた。

俺たちはそうやってここまで来た。

お前はどんどん前に進んでいった。お前はもう足踏みすらしないで突き進んでいった。

でも、俺は駄目だった。

頑張っ頑張っ、勝てないんだ。

今まで以上に頑張っ、お前に追いつくために頑張っ。

それでも駄目なんだよ。

俺が勝っ負けたの泥沼に沈んでる間に、お前はどんどん遠くへいく。それが悔しくて、情けなくて

必死になっリングに上がり続けた。

いつの日だったか、俺とお前が同じ日、同じリングに上がった時があっただろ。

当然俺はお前の前座だ。

それでも、お前が見てるかもしれないと思うと、いつも以上に気合が入った。あれは絶対に負けちゃい

けない戦いだっ。

自分でいうのもなんだけど、いい試合だっと思うよ。俺がプロになってからの、恐らく一番のファイ

トだっと思う。

判定までいっ、結局は負けただけだ。

なんだろうな、頭の中が真っ白ってのはこんなのを言うんだろうな。

わからないんだ。自分が今どうなってるのか、自分のことなのにわからないんだよ。

そのままぼんやり控室で座ってたなら、なんかいろいろ聞こえてきてさ。

ああ、お前勝ったのかって。おめでとうって、思ったね。

はっとしたよ。

俺はもう終わりなんだって。

真っ暗だ。

目の前が見えない。

お前が見えない。

もうなにも見えない。

そして俺は、自分自身からも目を背けた。

あのあとお前、俺の所に会いに来てくれたよな。今だから白状するけど、俺いたんだよ、そこに。

お前と顔会わせたくなくて居留守使ってさ。

すまん。

悪かったよ。

いやほんとマジですまん。

だって仕方がないだろ。

あの時お前に会っていたら、お前の顔を見てしまったら。俺を見るお前を見上げてしまったら。怖かったんだ。

俺が今から捨てようとしているものが、捨てられなくなっちゃう。

俺にとってはもう終わってしまったものが、もうなんの価値もなくなってしまったものが。もったいなくて、捨てられなくなっちゃう。

俺はリングを去って、お前から逃げるように故郷に帰った。

後悔と諦めだけが残った。

でもさ、今はどうしてとは思わない。どうして俺ではなくお前なんだとは思わないよ。なんだろうな、あれだ。

俺たちが目指したものはさ、同じようだったんだ。

俺が見ていたのは夢の先だった。でも、お前は夢だけを見ていた。

真っすぐに見ていた。

俺にとっては手段であったものが、お前にとっては全てだったんだ。

俺たちが戦っていた場所は力が全てだった。勝利にこそ意味があった。努力も想いも、負けちゃったら

全ては無意味だ。

そんな場所だからこそ、全てを夢にささげたお前が頂点に立ったってのは、とても素敵なことなんだと思う。

まあ、なんだ。

今でこそこんなすかしたことを言っただけだが、ずいぶんと時間がかかったよ。

わりと最近だ、認められるようになったのは。もう周りからはじじいだじいさんだ言われる年だぜ？年を取るってのはそう悪いことばかりじゃない。

時間が経てばなんとでもなる。喉元過ぎればなんとやら。

人間便利に出来てるよな。

でもあの頃は認められなかった。

わかっているけど『はいそうですか』じゃ納得できない。

あれからずっと、ぶすぶすとくすぶりながら、どうにもならない心を抱えて生きていくしかなかった。

でもよ、俺、今、幸せなんだ。

そりゃガキの頃からの夢はかなわなかった。それでも、幸せなんだよ。

引退して実家に戻ってさ、仕事継いで忙しい毎日だった。

何もかも忘れたくて我武者羅に働いてたらよ、いつのまにか彼女ができてあっさり結婚してた。

ガキも二人生まれて、今じゃ孫だっている。

どうだい？ 人並みに幸せな人生送ってるだろ。

そりゃ後悔だらけの人生だけどさ、終わってみれば案外楽しいもんだぜ。

ああ、別にまだお前の所に逝く気はないけどな。

言葉の綾だ。気にするなよ。

——なあ、お前は幸せだったのか？

お前はガキの頃からの夢をかなえた。

じゃあさ。

全てを犠牲にしたお前に残ったものはなんだ？

ボロボロの体でリングの上にすがり続けようが、いつか終わりはくる。

お前がグローブを外して何が残った？

人並みの生活も送れない、ガラクタミみたいな体以外になにが残ったんだ？

この寂れた墓が全てを物語っているよ。お前には、何一つ残っちゃいなかった。

引退してすぐだったっけか。

病院に運ばれて、よくわかんねえ機械につながれて、そのままだ。そのまま何年も何十年もベッドの上
に縛り付けられて。

大ニュースだったよ。

どこもかしこもお前のことで持ち切りだった。

最初だけはな。

あとはそのまま、死ぬまで音沙汰なしだ。

死ななきや話題にならないなんて、笑えねえヒーローだぜ。

なあ、俺たちの夢はそこまでしてかなえなければならぬものだったのか？

俺の前でお前が見続けていたモノは、一体なんだったんだ？

あの世で会ったら教えてくれ。

今ならいろいろ話せる気がするよ。

そうだ、この前見たよ。お前の試合。

頼んでもいないのにチケット送ってくれただろ？ お前がベルト巻いたあの試合だ。

もらうだけもらっていかなかったんだけどな。

あの頃は時期が時期だしさ、録画だけして結局見なかったんだよ。

でも、この前ラジオかなんかでお前が死んだってのを聞いたら気になってさ。

探してみたら見つかったんだ、テープ。

いやあ、いい試合だった。

チャンピオンがかわいそうになるくらいにはいい試合だったよ。

そうそう、それでよ。

俺がビデオ見てたらいつの間にか隣にガキが座ってやがったんだよ。

いつも元気だけは一人前のくせによ、静かにじーっと画面を見てるんだ。

最後、お前のパンチがずどんと決まるのを見たらそいつ、飛び上がって走っていきやがった。

あとで聞いたたらなんでも外で暴れまわったらしくてな、息子の嫁さんに怒られたよ。

変なモノ見せないでくださいって。

ヒヒヒ、変なモノだってよ、変なモノ。

でもよ、あのガキ、昔の俺たちと同じ眼をしてやがった。恥ずかしいくらいにキラキラした眼をさ。

あいつも俺たちと同じ道を進むのかな？

だとしたら、俺みたいになってほしくはないわな。

だからってお前みたいになってほしくもないけどな。

ああ、そうか。

お前はあっち側にいったのか。

今、少しだけ、お前のことを羨ましいと思ったよ。

少しだけな。

すまーん

色々ときぶアツプで